

否定的事象の経験と愛他性

The Experience of Negative Life Events and Altruism

安藤 清志

Kiyoshi ANDO

これまでの心理学的研究においては、愛他性や向社会的行動は肯定的な感情や事象と関連づけられてきた一方で、暴力や攻撃性は、否定的な感情や事象と結びつけられてきた。とくに前者に関する社会心理学的研究では、社会的責任性や返報性の規範が向社会的行動を生み出すこと、肯定的感情や共感性が援助行動を促進することなどが繰り返し示されてきた。しかし、これらの研究と比べればはるかに数は少ないものの、さまざまな苦難を経験した人々が、同じような苦難を経験した人に対する援助行動や、その他の社会的活動に従事することが指摘されてきた。たとえば、Lifton(1967; Lifton & Olson, 1976)は、ホロコースト生還者や被爆者など悲惨な経験をした人々が、自らの経験から何らかの教訓を汲み取り、それを基礎にしてより良い世界を築く(核兵器廃絶など)活動に身を投じることがあることを繰り返し指摘し、これを「生存者の使命(survivor mission)」と呼んだ。Herman(1992)も、「生存者はみずからの不運の中に政治的あるいは宗教的次元を認識し、おのれの個人的悲劇を社会的行動の基礎とすることによってその意味を変換できることに気がつく。(中略)外傷があがなわれるのはただ一つ、それが生存者使命の原動力となる時である」(p.182)と述べている。Bloom(1998)は、このような自らの経験の社会的変容に共通しているのは、個人や集団のトラウマはコミュニティの遺産に変換されなければならないという観念(道徳的コミットメント)であり、「不条理な暴力行為から意味をくみ取ろうとする試み」(p.182)であるとし、教育と予防による変革、セルフヘルプによる変革、救出による変革、証言と正義希求による変革、政治行動による変革、ユーモアによる変革、芸術による変革を代表的なものとしてあげている。

近年、このような外傷的経験の後に生じる向社会的行動ないし愛他的行動を、「苦難から生まれる愛他性(altruism born of suffering:ABS)」という概念のもとに研究しようとする流れが出来つつある(Staub, 2005; Staub & Vollhardt, 2008; Vollhardt, 2009)。そこでは、基本的には、愛他性が苦難の経験に「も」か「かわ」らず維持されるだけでなく、苦難を経験する「から」こ「そ」生み出されることもある、という認識がある。すなわち、これまでレジリエンス、ハーディネス、健康生成(salutogenesis)などの概念のように、個人の何らかの特性や生育環境が、非常に困難な状況においても心身の健康が維持されることを説明する概念が検討され、それぞれに基づいた研究が行われてきた。しかし、「苦難から生まれる愛他性」の場合は、苦難を生み出した状況自体や、それを経験する人の心理的過程、さらには苦難の意味を変容させるようなその後の経験が、愛他的行動を生起させることが仮定される(Vollhardt, 2009)。本稿は、こうした問題について、Staub(2005; Staub & Vollhardt, 2008)やVollhardt(2009)の論考に基づきながら若干の考察を行うことを目的とする。

1. 外傷的事象の心理的影響

自然災害、事故、病気、死別、犯罪などいわゆる外傷的事象(traumatic event)は、それを直接経験する人々はもとより、それを「代理的に」経験する人々や援助活動を行う人々にまで深刻な心理的、身体的影響を及ぼす可能性があることが知られている。その一つの原因は、人々が日常生活の中で想定している基本的な仮定が崩壊してしまうことであり、何らかの形で自己の変容に関わる「苦難が生み出す愛他性」を考える上でも重要な視点と考えられる。

Janoff-Bulman(1989)によると、人々が日常的に抱えている世界に関する仮定(world assumption)には3つの種類がある。第1は、自分を取り巻く世界に関する仮定である。すなわち、人は世界は善なる場所であり喜びの源泉であると仮定している。世の中にはそうとは言えない場所もあることは認識しつつも、自分が住む世界では人々は善良であり、悪い出来事よりも良い出来事のほうがよく起こる、と素朴に信じているのである。第2は、「世界は意味のある存在である」という仮定である。さまざまな出来事は、ある秩序をもっていると考えられる。なかでも、「良い行動をする人には良い結果が、悪い人には悪い結果が降りかかる」という信念はとくに重要である。第3は、自己は価値ある存在であるという信念である。私たちは一般的に、自分は愛すべき、善良な、そして能力を備えた人間だと考える。要するに、多くの人々にとって、「われわれの世界には、良いことのほうがたくさん起こるし、善良な人のほうが多い。悪い事が起こるとしても、それは不適切な行動をとった人や「悪い人」に起こるのであって、自分や近い人に起こるはずがない」と、素朴に想定しているのである。しかし、現実世界においては、事故や災害は「ランダム」に人々に降りかかる。したがって、自分自身あるいは近親者が事故・犯罪・災害などに遭遇すると、前述の世界観は大きく揺らぐことになる。私たちが拠り所としていた信念、当然のことを思っていた考えが通用しないことを思い知ることになるのである。「世の中は悪い事が起こるし、悪い人もいる。そして、そうした悪い出来事は自分にも降りかかる」ということを認めざるを得ない。

前述のような「世界観の崩壊」は、別の視点から見れば、新たな世界観を再構成する契機となる。外傷的事象に遭遇した人は、「なぜ、こんな事が起こるのか?」「なぜ、“私が”このような出来事に遭うのか?」など、以前に想定していた世界観では理解不可能な事象を理解しようとする強く動機づけられる(Burnell & Burnell, 1989; Worden, 1991)。そして、その過程で、実際に起こった「想定外の」事象を説明してくれる、そして自らが生活を持続することを可能にしてくれるような現実的な世界観を徐々に作り上げるのである(Janoff-Bulman & Yopyk, 2004)。

Joseph and Linley(2005, 2008)は、崩壊から意味構築に至るこうした問題に関連して「有機体価値づけ過程(organismic valuing process)」に基づくモデルを提案している。外傷的事象によって想定世界観が一時的に大きく揺らぐと、その経験を意味づける作業が行われる。経験の中には、こうした基本的仮定の枠内で理解できるものもある。たとえば、被害を受けたことについて「自分に責任があった」と考えれば、一応の理解は得られることになる。言い換えれば、同化(assimilation)することができる(図1)。しかし、同化が困難な情報を認知的および感情的に処理する過程は、そうした体験が意図しないのに繰り返し思い出されたり、それを思い出す状況を意識的あるいは無意識的に避けるなど、いわゆる外傷後ストレスの症状となって現れる。一方、外傷的経験の中には、想定世界観による理解を超えているために、それを修正あるいは調節(accomodation)しなければならないものがある。この際、肯定的な方向と否定的な方向に調節がなされる可能性がある。たとえば、それまで信じていた宗教の教義を信頼できなくなり希望を失ってしまう場合は、否定的な方向()の変化と考えることができ

る。一方、肯定的な変化（ ）もしばしば観察される。事故で九死に一生を得た人が、生きていることの大切さを再認識して家族と一緒にいる時間を優先させる、などの例がこれにあたる。また、このモデルでは、同化や調節には支持的な環境が必要だとして心理社会的要因の重要性が指摘されているが、この点は、外傷的経験に対する解釈づくり(account-making)が重要であり、さらにこの過程が適切な聞き手の存在によって促進されることを強調する(Harvey, 2000, 2002)のモデルと共通している。「改訂版」の世界観を構築しながら自らが経験した事象を理解し、意味を与えるという作業はさまざまな側面があるが(Park & Folkman, 1997) これまでの研究においては、「事象を理解する」という要素とその事象の中から「肯定的な側面を見いだす」という要素を区別することの重要性が指摘されている(Davis, Nolen-Hoeksema, & Larson, 1998; Janoff-Bulman & Frantz, 1997)。

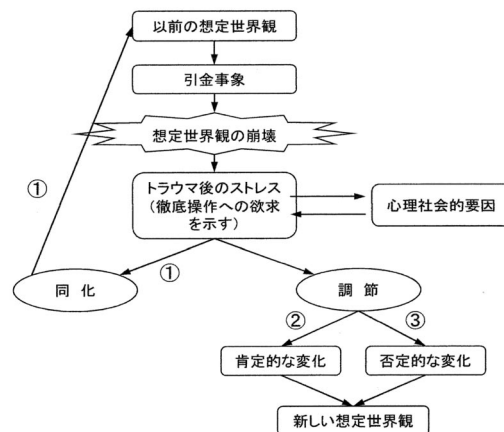


図1 有機体価値づけ過程(organismic valuing proces)のモデル (Joseph and Linley, 2005, 2008)

2. 心的外傷後の成長

外傷的経験をした人がしばしば「成長 (growth)」することが知られている。この場合、「成長」という語は、単に外傷的事象の前の状態に戻る「回復 (recovery)」ではなく、以前の水準を超えて成長するという意味が込められている。こうした「成長」のモデル(e.g., Calhoun & Tedeschi, 2006) は、必ずしも愛他行動を直接扱うものではないが、成長の諸側面には愛他性に関連する部分が少なからず含まれる。

このようなトラウマ後の成長の様相を明らかにするためにさまざまな尺度が開発されているが、(Tedeschi & Calhoun, 1995; Joseph et al., 1993; Park, Cohen, & Murch, 1996; McMillen & Fisher, 1998; 東村・坂口・柏木, 2001; 東村・坂口・柏木・恒藤, 2001), これらの尺度で扱われている「成長」の側面は比較的共通しており、「自己の強さ（自信やスキル）」、「死への態度の変化」、「人間関係の重要性の認識」、「生に対する感謝の念」、「ライフスタイルの変化」、「希望（新しい事への関心）」などが項目化されている。なお、外傷後成長は、外傷的な経験をした人々が自ら求めた結果ではなく、その後のさまざまな活動の過程で「自然に」変化するものであることに注意をしなければならない。Janoff-BulmanとBerger (2000) は、このような特徴を指してこれを「根本的なアンビバレンス」と呼んでいる。こ

の点は、「苦難が生み出す愛他性」を扱う場合にも同様に注意すべき点であろう。また、この領域の研究者が繰り返し指摘するように、こうした肯定的側面における変化が、必ずしも心理的苦痛と相殺されるわけではない、という認識も重要である。

3. 苦難が生み出す愛他性のモデル

以下では、Vollhardt(2009)に沿って、苦難から生まれる愛他性(altruism born of suffering;ABS)に関連する要因について概観する(図2)。このモデルでは、苦難を入力変数、向社会的行動を出力変数として設定し、動機づけ過程を媒介変数(群)、意志要因を調整変数(群)としている。

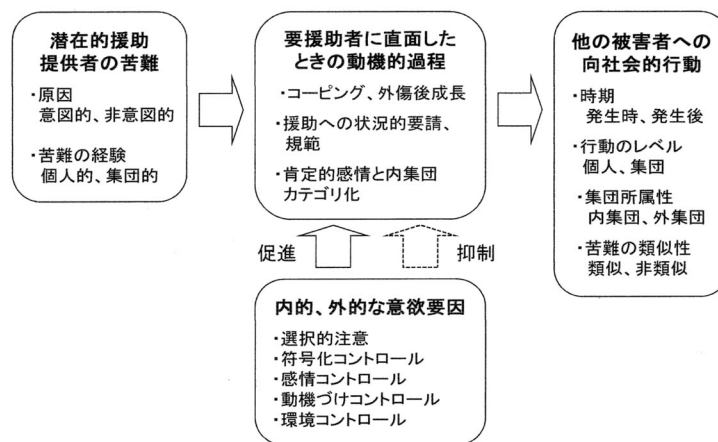


図2 「苦難が生み出す愛他性」のモデル(Vollhardt, 2009)

(1) 苦難の次元

Vollhardt (2009) は、苦難を 意図的な非意図的な、経験が個人的か集团的か、という次元で分類している。個人的で非意図的な苦難としては病気、近親死など、個人的で意図的な苦難としてはDV、性的虐待、排斥など、集团的で非意図的な苦難としては多くの自然災害、集团的で意図的な苦難としては戦争、テロリズム、集団虐殺などがあげられる。Vollhardt(2009)が主として関心をもつのは、最後のカテゴリに属する集団間の暴力的葛藤の問題であるが、その他のカテゴリーにも関連する要因が以下では数多く取り上げられる。

苦難の種類については、(他者や他集団による)意図的な苦難と、死別や自然災害のような「自然な」苦難に分類している。

(2) 向社会的行動の次元

ここでは、「出力変数」としての向社会的行動が扱われ、援助の種類、援助の受け手、の2つの次元が想定されている。援助の種類としては、援助行動が出来事が発生した時点で生じるか一定期間経過後に生じるか(援助の時点)、個人が援助するか集団で援助するか(援助の水準)という側面が、援助の受け手としては、内集団成員を援助するか外集団成員を援助するか(対象の集団成員性)、同じ

苦難を経験した人を援助するか、異なる種類の苦難を経験した人を援助するか（運命の類似性）という側面が含まれる。

（３）動機づけの過程

動機づけの過程は、苦難の経験と愛他的行動の関係を説明しようとするVollhardt (2009) のモデルの中で最も重要な部分であり、媒介変数として仮定されているものである。

コーピングと心的外傷後成長(PTG)

ストレス事象を経験した人は、さまざまなコーピング方略をとるが、援助行動もその一つと考えられる。たとえば Midlarsky(1991)は、援助行動はこうした人々にとって、自身の問題から注意を逸らせる、感情を肯定的な方向に変化させる、コンピテンスや効自己力感を高める、社会的統合性を高める、人生に意味を与えるなどの機能があるとしている。これらの中で最後の「人生の意味」の側面は、心的外傷後成長の研究で扱われてきた問題と重なる。前述のように、心的外傷後成長は、以前の想定世界観が外傷的事象によって崩壊した後、それを現実にも照らして意味のあるものに作り替えていく中で形成されるものとされる。

状況の要求と規範

災害現場において援助の必要度が高い他者から援助要請を受けたり、返報性の規範の従う場合のように、その状況において援助が「必要とされる」ことがある。こうした場面における援助の実践は、援助者の自己効力感を高めるだけでなく、他の場面における援助の可能性を高めたり、それを観察した人の援助行動を「誘発」することが考えられる。

否定的感情の除去、共感、視点取得

否定的感情除去モデルによれば、人は要援助者を観察することによって生じる自らの否定的感情を取り除くことが援助行動を第一義的に動機づける(Cialdini et al., 1987)。このモデルにおいても、また論争を繰り返してきた共感-愛他性モデルにおいても、被援助者との類似性や視点取得の容易さは援助の可能性を高めることが予測される。過去に類似経験をもつ人はこれらの条件を満たしており、いずれのモデルに依拠しても、援助を行う傾向が強まるものと考えられる。

社会的カテゴリー化、社会的アイデンティティ、解釈の水準

社会的カテゴリー化理論からは、カテゴリー顕現性が高まる状況においては内集団アイデンティティが高まることから援助行動が生じやすいことが予測される。大規模な自然災害や集団暴力などの状況においては、被災者あるいは被害者間で類似性(Westmaas & Silver, 2006)や共通運命の認知がなされやすく、これがカテゴリー顕現性を高めると考えられる。また、種類が異なる災害や事件の被害者や被災者であっても、共通する経験が抽出されれば抽象度の高い解釈(high-level construals)が生じ(Trope & Liberman, 2003)、これが援助傾向を高めることになる。

（４）意志要因(volitional factors)

Vollhardt(2009)のモデルでは、以上の動機づけ過程はこれを支える認知的、意志的要因(volitional factors)が調整変数として加わることによって、具体的な援助行動へ結びつくことが仮定されている。基本的には、Kuhl(1987)の一般的行為-制御モデルに基づいて、動機づけが影響を与えるのは行為への意図であり、意志過程がその意図を実現できるかどうかを決定する(e.g., Eccles & Wigfield, 2002)ことを仮定している。具体的には、不公正を常に意識させたり自分自身の問題に焦点を当てるように

導く「選択的注意」、他の被害者を援助しようとする動機づけと関連する状況の特徴（共通運命など）を認識する「符号化コントロール」、援助の意図を抑制する可能性がある否定的感情を処理する「感情コントロール」、競合する意図や目標（自分自身の苦痛の回復など）に照らして援助への動機を確認する「動機コントロール」、他の被害者を援助しようとする意図をサポートしようとする環境を求める「環境コントロール」が想定されている。

以上がVollhardt(2009)のモデルの概要であるが、苦難と愛他性の関係についてはStaub & Vollhardt (2008)においても若干異なる視点から扱われている。このモデルでは、外傷的事象に遭遇した後に被害者や被災者自身がどのような経験をし、それがどのような心理的变化を促進するかが強調されている。具体的には、心理的变化を促進する要因として、心理的回復（心理治療、真実と正義、暴力の源泉の理解など）、他者からのサポート（被害前および後の人間関係、被害時に受けた援助など）、自己の行為、指針の役割を果たす他者、の存在があげられている。心理的变化は2種類に分けられ、一つは自信や世界に関する肯定的な見方など基本的なものである。もう一つは、愛他的行動に直接的に結びつく変化であり、他者の苦痛の認識、視点取得、共感性、被害者との類似性の知覚、他者の被害の防止への責任の認知などが含まれる。このモデルでは、Vollhardt(2009)とは異なり、心理的回復によって基本的な人間の欲求が満たされた後で自己の行為や他者の存在が促進的に働いて自己変容が生じ、これが愛他的行動を生み出すことが仮定されている。心理的欲求としては、安全への欲求、自己概念、所属欲求、自律性、現実世界や自己の位置の認識などがあげられている。これらは、安全への欲求を除けば、他者あるいは集団からの排斥が脅威を及ぼす欲求として取り上げられているもの(e.g., Williams, 2007)とほぼ共通している。

Staub & Vollhardt (2008)のモデルがVollhardt(2009)のものとは異なる点の一つとして、前者では、自らが援助行動を実践することの重要性が強調されている。たとえば、災害現場で他の被災者を援助した経験が、後に「苦難が生み出す愛他性」の傾向を高めることがあげられる。この点に関してはMidlarsky (1991)も前述のように、援助行動が、自分自身の問題から注意を逸らせる、人生の有意義性と価値を高める、自己評価（個人的統制、自尊感情、自己効力感）を高揚する、ポジティブなムードを高め、ネガティブなムードを低減する、他者との社会的統合（コミュニティ感覚）を強める、などの影響をもつことを仮定しており、これらは愛他的行動を生み出す方向への心理的变化ということが出来る。外傷後成長の問題を扱ったHobfoll et al.(2007)は、イスラエルのガザ地区撤去に際して、自分の信念に基づいて撤去反対運動に参加した人のほうが、参加しなかった人よりもPTSD傾向が低い可能性を示し、これを行為焦点型の成長(action-focused growth)と呼んでいる。こうした研究も、必ずしも「愛他的」行動とは限らないが、自己の価値に沿った行動が肯定的変化を生み出す可能性を示唆している。

PTGのモデル(e.g., Calhoun & Tedeschi, 2006)との比較では、これらのモデルでは外傷体験をした人の認知的処理の側面が強調されるのに対して、「苦難が生み出す愛他性」のモデル、とくにStaub & Vollhardt (2008)では、愛他的行動に直接影響を及ぼすと思われる意図や意欲、また、その根底にある動機ないし欲求に重点が置かれている点に特徴がある。

4. 「苦悩から生まれる愛他性」と社会の対応

外傷的事象を体験した人の再適応の過程では、周囲の人々や、広く「社会」の側の理解とサポートが重要な役割を果たすが、被害者や被災者に対する社会の反応は必ずしも肯定的なものばかりではな

い。これまでの研究では、たとえ全く責任がなくても被害者を非難する傾向(victim blaming)が存在することが知られている(e.g., Lerner & Goldberg, 1999)。落ち度のない人が被害を受けるという状況は、自分も被害に遭う可能性があることを意味する点で、他者にとっても脅威となる。したがって、その責任を被害者に押しつけて非難するというやり方によって、自らの世界観(正当な世界)を防衛するのである。また、被害者に対する行動の中で、「出来事の影響を過小評価する」、「接触を避ける」、「話すことを避けたり、その出来事に関する感情の表出を避ける」、「批判したり何かと評価する」、「過度に面倒をみたがる」、「当人の再適応過程に関して不適切な期待を表明する」などは、受け手に非支持的なものとして受け取られることが知られている(Ingram et al., 2001)。外傷的事象を経験した人が自らの経験を語ることはその人が世界観を再構築する上で重要な役割を担うが、周囲のこのような対応は、受け手に社会的制約(social constraints)を感じさせることになる(Lepore & Revenson, 2007)。

社会的認識(social acknowledgment)という概念は、社会の側が被害者が置かれた特殊な状況を正しく理解し、その困難な現状を認めるような肯定的反応を提供することを指す(Jones, Müller, & Maercker, 2006; Maercker & Müller, 2004)。ここでの「社会」は、家族や友人だけでなく、重要な人物(周囲の権威者)、集団(職場や近隣住民)、意見の非個人的な表現(メディア)も含む。「自分たちのことをわかってくれている」という一般的な認識であり、社会的不承認(サポートされていない、誤解されている、阻害されていると感じる)の対極にあるものといえる。

冒頭で述べたように、被害者や被災者が苦難を経験したからこそ示す愛他的行動に対して、社会の側がそれに沿った反応ないし対応を示すことは、彼らにとって重要なサポートを構成することになる。人間にとって満たされるべき基本的欲求については、これまでも多くの研究者が論考を重ねてきた(e.g., Fiske, 2004)。また、人生の「意味」という観点からも、さまざまな側面の存在が指摘されている(e.g., Baumeister, 1991)。

被害者や被災者が「苦難から生まれる愛他性」に基づいて向社会的な活動に従事する過程において社会の側のサポートが必要であると同時に、こうした活動の根底にある欲求を十分に理解し、その活動が進展するようなサポートを実践することが、彼らの心理的なウェルビーイングに貢献することになると思われる。Baumesiter(1991)は、「人生の意味(meaning of life)」の構成要素として、目的、価値、自己効力、自己価値をあげている。「目的」は、自分が行っている活動が特定の目的に確実に向かっていると見なせることである。言い換えれば、自分が望ましいと考える将来の状態と現在の自分の行為を結びつけることができることを意味する。「価値」は、自分の活動の評価を決定する基準である。正しいと確信させてくれる価値観をもっていれば、人生は意味あるものになるが、そうした価値観をもたなければ、場合によっては罪悪感、不安、後悔を感じるようになる。「自己効力感」は、自分の行為が望ましい結果を生み出す力になるという信念である。自分の行為が目標の達成に貢献しているという実感は、人生の意味の重要な側面となる。「自己価値」は、自分は相応の価値のある人間だと感じる程度を意味する。被害者が前述の意味で価値ある行為を実践することができれば、自己価値は高揚することになる。

また、Staub & Vollhardt (2008) やVollhardt (2008)のモデルは強調されていないが、とくに集団的な暴力や災害の場合、自分自身が被害を受けるだけでなく、同時に近親者を喪うことが多いことにも注目すべきであろう。こうした場合、苦悩が生み出す愛他性は、しばしば死者との関連の上で意味をもつことになる。すなわち、被害者は社会的活動を通じて、自らの喪失とともに死者の喪失の意味をいわば「代理的に」構築しようとするのが考えられる。野田(1992)は、「亡き人の『遺志』な

る実体を想定し、遺志を継承し何らかの形で社会的活動に変えることによって、故人の生命を永続させようという心理機制」(p.247)を「遺志の社会化」と名づけている。こうした観点から考えると、被害者遺族がしばしば示す社会的活動は、人生の意味を構成する4つの要素(Baumeister, 1991)を死者が満たすようにする過程であるとも考えられる。言い換えれば、「遺志」を自らの目標とし、それを実現することで死者に「人生の意味」を付与し、その活動自体が自らの心理的ウェルビーイングに繋がる可能性が指摘できる。

多くの犠牲者を生み出す事件、事故、災害が発生した後、関係者はその再発防止に取り組むことになるが、被害者・被災者の心理や社会的活動について十分に理解し、それに沿った社会変革を目指すことが重要と思われる。

【引用文献】

- Baumeister, B.F. (1991) *Meaning of life*. Guilford Press.
- Bloom, S. L. (1998). By the crowd they have been broken, by the crowd they shall be healed: The social transformation of trauma. In R.G. Tedeschi, C.L. Park, & L.G. Calhoun (Eds.), *Posttraumatic growth: Positive changes in the aftermath of crisis*. (pp. 179-213). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Burnell, G.M., & Burnell, A.L. (1989). *Clinical management of bereavement: a handbook for healthcare professionals*. (長谷川浩・川野雅資監訳) 死別の悲しみの臨床 医学書院, 1994.
- Calhoun, L. G., & Tedeschi, R. G. (2006). The foundations of posttraumatic growth: An expanded framework. In L.G. Calhoun & R.G. Tedeschi (Eds.), *Handbook of posttraumatic growth: Research & practice*. (pp. 3-23). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- Cialdini, R. B., Schaller, M., Houlihan, D., Arps, K., Fultz, J., & Beaman, A. L. (1987). Empathy-based helping: Is it selflessly or selfishly motivated?. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 749-758.
- Davis, C. G., Nolen-Hoeksema, S., & Larson, J. 1998 Making sense of loss and benefiting from the experience: Two construals of meaning. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 561-574.
- Eccles, J. S., & Wigfield, A. (2002). Motivational beliefs, values, and goals. *Annual Review of Psychology*, 53, 109-132.
- Fiske, S. T. (2004) *Social beings: A core motives approach to social psychology*. New York: Wiley.
- Harvey, J. H. (2000). *Give sorrow words: Perspectives on loss and trauma*. Philadelphia, PA: Brunner/Mazel. (J.H. ハーヴェイ 安藤清志監訳 (2002). 悲しみに言葉を：喪失とトラウマの心理学 誠信書房)
- Harvey, J. H. (2002). *Perspectives on loss and trauma: Assaults on the self*. Thousand Oaks, CA, US: Sage Publications, Inc. (J.H.ハーヴェイ 和田実・増田匡裕編訳 (2003). 喪失体験とトラウマ：喪失心理学入門 北大路書房)
- Herman, J. L. (1992). *Trauma and recovery*. New York: Basic Books. (J.L. ハーマン 中井久夫訳 (1996). 心的外傷と回復 みすず書房)
- 東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤暁 (2001). 死別経験による遺族の人間の成長 死の臨床, 24, 69-74.
- 東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫 (2001). 死別経験による成長感尺度の構成と信頼性・妥当性の検証 臨床精神医学, 30, 999-1006.
- Hobfoll, S. E., Hall, B. J., Canetti-Nisim, D., Galea, S., Johnson, R. J., & Palmieri, P. A. (2007). Refining our understanding of traumatic growth in the face of terrorism: Moving from meaning cognitions to doing what is meaningful. *Applied Psychology: An International Review*, 56, 345-366.
- Ingram, K.M., Betz, N., Mindes, E.J., Schmitt, M.M., & Smith, N.G. (2001). Unsupportive responses from others concerning a stressful life event: Development of the unsupportive social interaction inventory. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 20, 173-207.
- Janoff-Bulman, R. (1989). Assumptive worlds and the stress of traumatic events: Applications of the schema construct. *Social Cognition*, 7, 113-136.
- Janoff-Bulman, R., & Berger, A.R. (2000). The other side of trauma: Towards a psychology of appreciation. In J.H. Harvey & E.D. Miller (Eds.), *Loss and trauma: General and close relationship perspectives*. Brunner- Routledge.
- Janoff-Bulman, R., & Frantz, M.C. (1997). The impact of trauma on meaning: From meaningless world to meaningful life. In M.J. Power & C.R. Brewin (Eds.), *The transformation of meaning in psychological therapies: Integrating theory and practice*. (pp. 91-106). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- Janoff-Bulman, R., & Yopyk, D. J. (2004). Random outcomes and valued commitments: Existential dilemmas and the paradox of meaning. In J. Greenberg, S.L. Koole, & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of Experimental Existential Psychology*. (pp. 122-138). New York: Guilford Press.
- Jones, B., Müller, J., & Maercker, A. (2006). Trauma and posttraumatic reactions in German development aid workers:

- Prevalences and relationship to social acknowledgement. *International Journal of Social Psychiatry*, 52, 91-100.
- Joseph, S., & Linley, P. A. (2005). Positive adjustment to threatening events: An organismic valuing theory of growth through adversity. *Review of General Psychology*, 9, 262-280.
- Joseph, S., & Linley, P. A. (2008). Reflections on theory and practice in trauma, recovery, and growth: A paradigm shift for the field of traumatic stress. In S. Joseph, P.A. Linley(Eds.), *Trauma, recovery, and growth: Positive psychological perspectives on posttraumatic stress*. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons Inc.
- Joseph, S., Williams, R., & Yule, W. (1993). Changes in outlook following disaster: The preliminary development of a measure to assess positive and negative responses. *Journal of Traumatic Stress*, 6, 271- 279.
- Kuhl, J. (1987). Action control: The maintenance of motivational states. In F. Halisch & J. Kuhl (Eds.), *Motivation, intention and volition* (pp. 279-291). Berlin: Springer.
- Lerner, M.J., & Goldberg, J.H. (1999). When do decent people blame victims? The differing effects of the explicit/rational and implicit/experiential cognitive systems. In S.Chaiken, & Y.Trope(Eds.), *Dual-process theories in social psychology*. New York: Guilford Press. Pp.627-640.
- Lifton, R.J. (1967). *Death in life: Survivors of Hiroshima*. Random House.
- Lifton, R. J., & Olson, E. (1976). The human meaning of total disaster. *Psychiatry: Journal for the Study of Interpersonal Processes*, 39, 1-18.
- Maercker, A., & Müller, J. (2004). Social acknowledgment as a victim or survivor: A scale to measure a recovery factor of PTSD. *Journal of Traumatic Stress*, 17, 345-351.
- McMillen, J. C., & Fisher, R. H. (1998). The Perceived Benefit Scales: Measuring perceived positive life changes after negative events. *Social Work Research*, 22, 173-186.
- Midlarsky, E. (1991). Helping as coping. C.S. Margaret (Ed.). (1991). *Prosocial behavior. Review of personality and social psychology*, Vol. 12. (pp. 238-264). Thousand Oaks, CA: Sage Publications, Inc.
- 野田正彰 (1992). 喪の途上にて : 大事故遺族の悲哀の研究 岩波書店
- Park, C.L., Cohen, L.H., & Murch, R.L. (1996). Assessment and prediction of stress-related growth. *Journal of Personality*, 64, 71-105.
- Park, C.L., & Folkman, S. (1997). Meaning in the context of stress and coping. *Review of General Psychology*, 1, 115-144.
- Staub, E. (2004). Basic human needs, altruism, and aggression. In A.G. Miller (Ed.), *The social psychology of good and evil*. (pp. 51-84). New York: Guilford Press.
- Staub, E. (2005). The roots of goodness: The fulfillment of basic human needs and the development of caring, helping and nonaggression, inclusive caring, moral courage, active bystandership, and altruism born of suffering. In G. Carlo, & C.P. Edwards (Eds.), *Moral motivation through the life span. Volume 51 of the Nebraska symposium on motivation*. (pp. 33-72). Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- Staub, E., & Vollhardt, J. (2008). Altruism born of suffering: The roots of caring and helping after victimization and other trauma. *American Journal of Orthopsychiatry*, 78, 267-280.
- Trope, Y., & Liberman, N. (2003). Temporal construal. *Psychological Review*, 110, 403-421.
- Vollhardt, J. R. (2009). Altruism born of suffering and prosocial behavior following adverse life events: A review and conceptualization. *Social Justice Research*, 22, 53-97.
- Westmaas, J. L., & Silver, R. C. (2006). The role of perceived similarity in supportive responses to victims of negative life events. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 1537-1546.
- Williams, K.D. (2007). Ostracism. *Annual Review of Psychology*, 58, 425-452.

【Abstract】

The Experience of Negative Life Events and Altruism

Kiyoshi ANDO

Previous research on altruism has mainly focused on positive events or emotions. Meanwhile, the effects of negative events and suffering focused on aggression, depression and other dysfunctional behavior. Recently, however, some scholars have begun to examine the relationship between suffering and altruism under the name of "Altruism Born of Suffering(ABS)." This article briefly examines the effects of traumatic events on victims' assumptions on the world and resultant "Post-traumatic Growth(PTG)." Then two models of ABS(Staub & Vollhardt, 2008 and Vollhardt, 2009) are introduced and compared. Furthermore, it was discussed how ABS is related to victims' well-being and society in general.